

【特別講演6】 第23席 「日本近代の鍼灸図書とその背景について」

大阪 森 秀太郎

1 はじめに

明治―大正―昭和初期にかけて多くの鍼灸図書が出版されている。正確な数字は分からないが、600点以上にのぼるものと思う。当校に所在するものでも420点に達している。

江戸時代に隆盛をきわめた鍼灸が、明治維新によって禁止され、医師の指導がなければ治療できないと言う過酷な状況におかれ、さらに営業できるようになっても、内務省によって、営業取り締り規則が実施され、人の健康や福祉に寄与する職業でありながら、まるきり悪いことをしているような取り締まり規則によって縛られてきた。西洋医学でなければ医療でないような環境下で、先輩たちが如何に苦勞して生き残ってきたか、出版の歴史をみればよく分かる。また江戸時代の流派や技術が伝承されずに消えていったことも残念ながら事実である。

2 一般書の特徴

明治初期に出版された鍼灸書をみると、鍼灸師ではなく医師の書かれたものが多く、文明開化の西洋医学の取り入れが如何に急であったかが良く分かる。

明治21年に出された佐藤利信の『鍼学新論』と同25年の大久保適齊の『鍼治新書』がある。ついで明治42年の久木田七郎の『鍼灸指南』がいつでも特徴があり注目される。また盲学校の鍼灸教育の草分けと言われている奥村三策の『按摩鍼灸学』が目にとまる。玉森貞助の『生体写真鍼灸経穴図譜』が出色である。

3 教科書について

明治42年鍼灸取り締り規則により、営業免許証が交付きされ、鍼灸按摩を業とするものは、内務省規則にもとずく各府県の試験に合格しないと開業できなかった。そのため、私塾や学校が設立され、鍼灸教育が行われるに到った。通信教育を専門とする学校もあった。その数は50校以上に上る。いずれにしてもテキストが必要で、多く教科書が出され、特に大阪の学校ではドイツ語の入った教科書さえ出ている。

4 業界雑誌、研究誌等について

雑誌の発行については、明治25、26年頃東京では『鍼科彙報』という雑誌が、大阪では『日本鍼灸術研究会雑誌』が発行され、明治35年には『日本鍼灸雑誌』が発行されている。其の総数は45種類にもものぼっている。『日本鍼灸雑誌』は明治35年（1902）以来、昭和18年（1943）にいたるまで、毎月発行され続けた雑誌として、他の多くの雑誌がつぎつぎと廃刊されたなかで珍しい存在であった。残念ながら雑誌の宿命かその多くが散逸して所在が分からない。雑誌はその当時の学問的レベル、業界の動向を知る上で重要であるにも関わらず、その大部分が残っていないのが残念である。

5 終わりに

時代の変遷に応じて図書は大きな役目を果たしてきたが、我々はこれらの文化遺産を大切にするとともにその価値を再発見する必要がある。